

<巻頭言>



大陸移動説異聞

松田芳夫*

地球物理学や地質学が専門というわけではないが、ウエゲナーの大陸移動説には若い頃から関心を引きつけられた。

何しろ広大な大陸が割れたり、地球の表面を漂流したりするというのだから、アイデアの雄大なことロマンに富むこと、学問の世界で血わき肉おどるという類の話はそう無いだろうが本当に興奮する話であった。

素人目にも南米大陸とアフリカ大陸の海岸線が一枚の紙を破いたかのようにピッタリ重なるというのだから説得力もあるし、地図や地球儀を眺めるのが好きな人は似たような考えを抱いたかも知れない。

しかしながら私の高校時代の昭和30年代初期の地理の教科書には、過去の学説として否定的にしか紹介されていなかったのが意外であった。

いわく、“…大陸移動を生じさせる原動力となる力学的な力の説明が出来ないので現在では定説とされていない。……”という全く味もそっけも無い記述であった。

それなのに昭和40年代に入ってから、大陸移動説はプレートテクトニクスとして再登場してきたのである。伝統的な地質学ではなく、最新の観測技術に支えられた地球物理学的知見の拡大と異論をはさませない種々の傍証の集積により、プレート理論はあっという間に一般化した。

従来、大陸移動説の難点とされた大陸移動の原動力もマンテル対流や海底拡大説などで説明づけられるようになり、今や大陸の配置というようなマクロな問題ばかりか、地震や火山の噴火のような地域的な現象の説明にまで適用され、観測技術の進歩により太平洋プレートは日本列島に向けて年間5～6 cmの速さで移動しているなどと云われている。

最近では地球をとび出して、火星や金星などの他の天体の表面構造を説明するのに登場したりする勢いである。

時代とともに学説が進歩発展するのは当然であるとしても、たった数十年

* 建設省河川局長

で迷妄の説が万能の説になったりするところが、所詮、人間の考える限界であろうか、少々如何わしい感じすらする。

神戸の大地震以来、地震の活断層説が一般にも当然のこととされるようになったが、三十数年前、大学で教わったときは、断層は地震の結果、生じるものであって、断層が地震の原因と決めつけるアメリカの学者は行きすぎだということだった。

田 学問が日時とともに進歩するのは大いに結構であるが、その時々を理論を断定的に主張されるとそれじゃ今までの理論は何だったのかと云いたくなる。

科学の世界といえども人間が解釈説明する世界であるのだから単なる真実性だけでなく何かモラルのようなものが必要なのではないか、人間は大自然の前では小さな存在にすぎないのだからもう少し謙虚に臨むべきであると思うこの頃である。